



TITLE:

終南山の變容：盛唐から中唐へ

AUTHOR(S):

川合, 康三

CITATION:

川合, 康三. 終南山の變容：盛唐から中唐へ. 中國文學報 1995, 50: 55-67

ISSUE DATE:

1995-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177584>

RIGHT:

終南山の變容

——盛唐から中唐へ——

川 合 康 三

京都大學

終南山は古くは先秦の地誌である『尚書』『禹貢』、その雍州の記述の中からすでに名が見える。

雍州は……終南・惇物より、鳥鼠に至る。

但しここでは雍州に屬する「三山の名」（僞孔傳）の一つであるという以上のことは分らない。

風景がすぐれて認識に関わることは、いまさら言葉を費やすまでもない。自然は人間が關與する以前から存在しているのに對し、風景は人間の認識を通して捉えられた自然なのだから。しかも自然の中から何を選び取り、いかに再構築するかには、文化や時代が大きく作用している。したがって、どのような文化圏に屬しているかによって、それぞれに異なる風景が「見られる」ことになる。

一つの風景が時代によってどのように變貌するのか、ここでは終南山を取り上げて、盛唐から中唐への變化をたどってみよう。文學として描き出された終南山の變容の中に、中唐という時代における認識の變化のありさまを探ることができるかも知れない。

終南山の變容（川合）

『詩經』では十篇ほどの詩に「南山」が見えるが、大體は各地の南の山であって、終南山に特定できない。「秦風・終南」の篇は終南山を指すに違いないが、「終南何か有る、條有り梅有り。君子至る、錦衣狐裘」、山にはそこにふさわしい物があるように、と唱い起こす戀愛詩の興として用いられているもので、これは後代に繼承されて行かない。ただ「小雅・天保」が君主をことほぐ言葉を連ねた最後の章は、南山がその後には持ち續ける意味の一つをすでに含んでいる。

如月之恆 月の恆の如く

如日之升 日の升るが如し

如南山之壽 南山の壽の如く

不騫不崩 騫^かけず崩^れず

如松柏之茂 松柏の茂るが如く

無不爾或承 爾に承くる^{たぐひ}或らざる無し

山が恆久不變の存在であることから、長壽への祈念に結び付けられている。山の持つ靈性がここでは永世の象徴として働いているのである。以後、「南山の壽」はことに天子の長壽を祈る際の定型の措辭として用いられ、それは今日でも「福如東海、壽比南山」といった成語として生きている。

京都を唱う漢賦にももちろん終南山は登場する。班固「西都賦」(『文選』卷二)には、「左は函谷・二嶠の阻に據り、表するには太華・終南の山を以てす」。すなわち華山とともに都の指標としてその名を擧げている。張衡「西京賦」(『文選』卷二)では、長安を取り圍む地形を列敘した部分に、「前に於ては則ち終南・太一、隆崛崔嵬、隱鱗鬱律として、岡を蟠冢に連ね、杜を抱き^こ鄠を含み、澧^{ほう}を飲^すい鎬^こを吐く」と言う。ここでは都を難攻不落の地たらしめている地理的條件の一つとして終南山を擧げている。

都の指標、或いは都を圍繞する要害、それがいずれも長

安という國の中心に結び付いた、いわば地上權力の象徴とすれば、一方で終南山は權勢から離れて隱者が住まう靜謐な空間としての意味を帯びることもある。例えば班固は「終南山の賦」(『初學記』卷五)では「榮期・綺里、此に心を恬んず」と、榮啓期・綺里季といった隱棲者が安らぎを得る場として、また「彭祖や安期生が長生を獲得した場として以て延年す」と、彭祖や安期生が長生を獲得した場としてその地を言い、それにあやかっ^て天子がそこで長壽を願ったことに續けている。このように漢代では終南山は、地上世界の中心である帝都の權力と、權力から遠ざかり精神の安逸と長生を保證する超俗的空間という、兩義的なシンボルを備えているのである。

終南山が世俗と超俗との二重の象徴性を帯びていたことは、その表記からも讀み取ることができよう。『左傳』昭公四年には、「九州の險」の一つとして「中南」を擧げている。杜預が「始平武功縣の南に在るなり」と言うように、「中南」は明らかに終南山を指している。潘岳の『關中記』(『說郛』写六二)にも、「終南山、一名中南、天中に在るを

言う。都の南に居るなり」という断片的記事が見える。「中南」は潘岳が言うように天の中心の意味であり、それは天と對應する地上世界の中心の意味にもなる。「終南」と表記すれば、おそらくそれは都の南の果ての意であり、世俗的世界から隔たった超俗性と結び付くだろう。

漢代の賦に見られる終南山のシンボリズムは六朝の文學にも繼承されていく。西晉・潘岳「西征の賦」(『文選』卷

一〇)は漢の京都の賦が時代に沿って西都(長安)から東都(洛陽)へと配置されているのと對照的に、時間軸でなく自分の旅程という空間の移動に沿って、また二都の順序も逆に洛陽から長安へと敘述され、且つそれぞれの場所にまつわる過去に遡及することによって時間とも重ね合わせられているのだが(「西征賦」の詳細な分析については、原田直枝「潘岳『西征賦』攷」、『中國文學報』第四十四冊、一九九二、を参照)、長安に近づいた部分に、「終南に面して雲陽を背とし、平原に跨りて蟠冢に連なる」の句がある。これは長安が周囲の地理的條件に恵まれていることを語るもので、都を護る要害としての終南山の意味を引いている。

終南山の變容(川合)

梁・沈約「鍾山の詩 西陽王の教に應ず」(『文選』卷二二)は、建康の北に位置する鍾山のめでたさを讀える詩であるが、

靈山紀地德 靈山は地の德を紀し

地險資嶽靈 地險は嶽の靈なるに資る

と、山の靈性と大地との一般的關係から唱い起こしたあと、終南山と少室山の名が挙げられる。

終南表秦觀 終南は秦觀を表し

少室邇王城 少室は王城に邇し(一章)

終南山は長安の宮城の指標であり、中嶽嵩山の西峰少室山は洛陽の都に近接している、と云うのは、地上の中心性のシンボリズムを繼承しているのだが、しかしそれは脱俗の空間であることと矛盾するものではなく、鍾山は道佛の徒が憩う場でもある。

多值息心侶 多く心を息むる侶に値い

結架山之足 架を山の足に結ぶ

八解鳴澗流 八解はちげ澗の流れに鳴り

四禪隱巖曲 四禪 巖の曲に隱る(四章)

淹留訪五藥 淹留して五藥を訪い

顧歩佇三芝 顧歩して三芝を佇^{まつ}（五章）

山は超俗者の聖なる空間であることによって、都を圍繞して天子に隣接するのにふさわしい靈性を備えた存在たりうるのである。このように沈約の詩では漢賦に見た二重のシンボリズムが調和を得て溶け合っているのだが、やはり山を風景として眺めるよりも、全編を貫いているのは山の持つ象徴性である。二章には山の峻嚴な姿が描出されているが、それも神山であることの證しとして收束する。

發地多奇嶺 地より發して奇嶺多く

干雲非一狀 雲を干すこと 一狀に非ず

合沓共隱天 合沓として共に天を隱し

參差互相望 參差として互いに相望む

鬱律構丹巘 鬱律として丹巘を構え

峻嶒起青嶂 峻嶒として青嶂を起こす

勢隨九疑高 勢いは九疑に隨いて高く

氣與三山壯 氣は三山と與に壯なり

終南山そのものを詩題に立てて詠ずる作品は、都の立地

の上から、北周に至って見られるようになる。北周・宇文昶（李昶）「駕に陪して終南山に幸す」、隋・胡師耽「終南山に登る」詩などが『文苑英華』（卷二五九）に並べられている。そこには部分的に山の姿の描寫があらわれているものの、神仙の空間としての象徴的な意味がなお優勢である。終南山が帯びてきた意味付けから解放されて、單に風景として眺める視點はまだ獲得されていない。その中で宇文昶の作に唱和した庾信の「駕に陪して終南山に幸す 宇文内史に和す」詩（『文苑英華』同卷）が、季節の移り變わりによって終南山の植物が微妙な變化を見せるところを捉えているのは、與えられている意味から脱して、自分の目で捉えた風景へ轉換していく兆しを含んでいると言えようか。

新蒲節轉促 新蒲 節轉た促し

短筍籊猶重 短筍 籊猶お重し

とはいっても、この句は蒲や筍だけを微視的に捉えたもので、山そのものについては觀念的な域を出ていない。

終南山が詩の題材として重きを成すのは、それが身近な存在になる唐代に入ってからである。そのことは類書にお

ける終南山の項目の配當によくあらわれている。『爾雅』の「釋山」の中には五嶽はあっても終南山の名はない。『藝文類聚』（唐・太宗期）には各地の山が挙げられているが、終南山の名は見えない。『初學記』（玄宗期）、及び今見られる『白氏六帖事類集』になると、五嶽に續いて終南山が挙げられている。それが宋初に勅撰された『太平御覽』では五嶽（卷三九）の前、神仙の山を並べた卷三八の末尾に置かれ、『文苑英華』の詩の部分でも、個別的な山としては最初に終南山の詩が挙げられて、その後五嶽の作が續く。唐代の作品が九割を占める『文苑英華』の中では、山に關する詩として終南山が最も重い比重を占めることになるのである。

このように終南山は唐代において詩の重要な素材となるのだが、それを予兆するかのように、唐初に太宗の「終南山を望む」詩がある。

重巒俯渭水 重巒 渭水を俯し
碧嶂插遙天 碧嶂 遙天を挿す
出紅扶嶺日 紅を出す 嶺に扶る日

終南山の變容（川倉）

入翠貯巖烟 翠に入る 巖を貯む烟

疊松朝如夜 疊松 朝も夜の如く

復岫闕疑全 復岫 闕も全きかと疑う

對此恬千慮 此れに對して千慮を恬んず

無勞訪九仙 九仙を訪ずるを勞する無し

末二句に至って、終南山を仙界とみなし、そこから精神の安らぎが得られることを述べて詩を結ぶ。それは班固の「終南山賦」に「恬心」と言っていたように、從來の終南山にまつわる意味を受け繼いでいるのだが、しかし山全體の形象、山の内部の描寫など、山を風景として捉える目がすでに確かに備わっている。唐初この詩では、終南山を超俗の空間とみなして心の平安を得るといふ要素と、風景として山を見ろという要素を併せ持つことによって、唐以前と唐以後との過渡期を特徴づけるものとなっている。これから後の終南山の詩は、隱棲の地という象徴性をひきずりながらも、しだいに風景としての面を強めていく。

盛唐には名高い王維の「終南山」の詩がある。

太乙近天都 太乙 天都に近く

連山到海隅 連山 海隅に到る

白雲迴望合 白雲 望を迴らせば合し

青靄入看無 青靄 入りて看れば無し

分野中峰變 分野 中峰に變じ

陰晴衆壑殊 陰晴 衆壑殊なる

欲投人處宿 人處に投じて宿せんと欲し

隔水問樵夫 水を隔てて樵夫に問う

終南山の最高峰太乙は天上の都に接近せんばかりに高く

そびえ、終南山から廣がる山並みは地の果ての海に至るまで續いている。大地の中心に位置して垂直と水平のいずれにも限りなく廣がる終南山の雄大さから語り始めるこの詩は、いかにも盛唐詩らしいダイナミックな風景を繰り廣げているが、その雄大さは忠實な敘景によるよりも、盛唐詩人の世界觀に裏打ちされた形而上的な概念によって作り出されているというべきであろう。第一句は「太乙」「天都」の語を用いることによって多義性を帯びている。「太乙」は終南山の主峰の名であるとともに、北極星を意味する星の名でもあり、「天都」は天上の都であると同時に天子の

居する都でもある。天上に限定すれば第一句は北極星と天界の中心との關係を指すことになり、地上に限定すれば終南山と帝都との關係を指すことになる。もとより天界と地上世界とは對應すべく關係づけられているものであるが、このように第一句は天上と地上との二重の意味を含んでいる。しかしそれは次の第二句を読むことによって、何を指しているか定められる。第二句が水平に延びる廣がりというところから、第一句の方は垂直方向の勢いをいうと理解され、地上の終南山の最も高い「太乙」の峰が天上の都「天都」に達せんばかりにそびえ立つという意味を獲得するのである。とはいえ、その意味を読み取るだけでは單に終南山の高さを誇張するに過ぎないことになるが、このように多義的な措辭を散りばめることによって一句は宇宙論的な廣がりを備えることになる。

第二句はそれに比べたら實景に近い、と思うのも誤りで、「海隅」はこの地の果てにあるであろうところの邊際であり、これも彼らの世界觀に依據した、やはり抽象的レベルの認識といわねばならない。

ちなみにこれも盛唐の、しかし王維と違ってごくわずかな詩のみによって知られる王之渙の「鸛雀樓に登る」詩、その「白日 山に依つて盡き、黃河 海に入りて流る」の句も、ふつう考えられているように目で見た實景を詠んだものではない。東は中條山の山並みが續くが、西には山影が見えるべくもなく、二句は大地の西の果てにあるであろうところの山に沈まんとして落ちていく太陽、東の地の果てにあるであろうところの海に流れ込まんとして東流する黃河、を唱っているに違いない。東と西の極限に收束しようとして運行する太陽と黃河は、しばしば時間の象徴となるものでもある。李白の「古風」其一も、

黃河走東溟 黃河 東溟に走り

白日落西海 白日 西海に落つ

逝川與流光 逝川と流光と

飄忽不相待 飄忽として相待たず

と、やはり黃河と白日が東西の地の果てに向かって運行し、それが流れてやまない時間の象徴となっていることを示している。天空と地表の全體を運行する太陽と大河の大

終南山の變容（川合）

きな動きを時間の流れに重ね合わせて唱い上げるところに、いわゆる「推移の悲哀」の感傷を越えた雄々しいリリジズムが躍動する。盛唐詩の雄大な風景は中國の廣大な風土によって説明されることが多いが、地形の實際よりも大事なのは、盛唐詩人の世界觀と結び付いてこうしたダイナミックな風景が生み出されていることである。

さて王維の詩の第三句・四句は一轉して終南山の内部の具體的描出へと移り、具體性は作者自身の視點に即した表現によってあらわになる。ぐるっと視線を巡らせば、白い雲は一つに合わさるかのようであり、青い靄はその中へ入って見れば消えてしまう、という知覺を、自分の感覺が受け取ったままに具象的に語るが、第一・二句が勢いをはらみつつも靜止した存在の堂々としたさまを描いていたのと對蹠的に、變幻自在に活動してやまない世界を捉え、その無碍の變容のさまを、作者は自身の感覺を翻弄されつつ楽しんでゐるかに見える。

第五・六句は終南山の領域の廣大さを、天文との對應關係すら二つの分野にまたがり、山岳の内部でさえ天氣が異

なるということによって述べているが、地上世界が天上世界と正しく對應關係にあり、それゆえにそれぞれの天候まで異なるという認識も、天と地との對應というあるべき秩序と實際の感覺とが食い違うことなく一致するという安定した世界觀の上に立っている。

第七・八句に至って初めて人間が登場し、作者の行動が説明される。宿を問おうとする作者と、呼び掛けられて足を止めた樵夫とが川を挟んで相對する、いかにも王維らしい一幅の繪のような靜止した瞬間、動を含んだ一瞬が捉えられている。人物も王維の詩にあっては自然の一部であるかのように周圍の風景の中に柔らかく溶け込んでいる。

この詩では從來の終南山がもっていた隱棲の地としての意味は、末句の「樵夫」にわずかに痕跡をのこしているに過ぎない。何よりもこの詩全體を貫いているのは、世界の中心に居座る終南山の堂々とした存在感であり、それは觀念上の存在と實際に知覺した景觀との一致から生み出されている。そこに我々は盛唐詩人の世界の存在に對する搖るぎない信頼を讀み取ることができよう。

盛唐ではほかに祖詠の「終南 餘雪を望む」詩が、五言六韻の作であるべき進士科の課題に四句のみを提出したという逸話『唐詩紀事』卷二〇で知られている。同題の詩がほかにのこっていないので事實と確定はできないが、事實であるとすれば試帖詩に課せられるほどに終南山は詩題として行き渡っていたことになる。のみならず、終南山の風景を「餘雪」という、冬と春の境界の一時期に限定しているのは、祖詠が王維に比べてマイナーな詩人であるためだけでなく、終南山が風景の對象として十分に成熟し、それゆえに終南山の特殊な場面を求める段階に至っていたことを示している。それは以下に述べる中唐詩に連續していく傾向である。

概して中唐の終南山の詩は、全體を一氣に把握することはもはや斷念したかのように、ごく限られた部分だけに絞って詠じられている。中唐に至って詩の題材としての終南山がどのように變容するか、たびたび終南山を唱っている賈島の例がそれをよく示している。

賈島の「山を望む」詩は、終南山が長雨に降り込められ

て久しく見えなかったのが、やっと雨が上がり、新鮮な緑の姿を呈した光景を描いている。雨上がりの終南山という一つの特別な場面が題材となっているのである。そこには終南山の全體を畏敬をもって眺めるという態度はもはやなく、「之を望めば朋親の如し」、身近なものとして捉え、山と個人的な親密な關係を結んでいる。「冬月 長安の雨中に終南の雪を見る」詩では、詩題に云うとおり、長安では雨が降っているが終南山ではそれが雪になっているという、はなはだ限定された光景が唱われる。このように賈島の終南山の詩は、終南山の見せる特殊な一面面、それだけを抑えるのである。

これは賈島一人に限られるものではない。劉禹錫には「終南秋雪」の詩がある。そこでも終南山の全容を取り上げるのではなく、まだ秋のうちに高い峰ゆえにすでに雪をかぶった終南山という、時間的に限定された特殊な一面面が選り取られている。白居易がそれに和した「劉郎中の終南山の秋雪を望むに和す」詩の冒頭にはこういう、

遍覽古今集 遍く古今の集を覽るも

終南山の變容（川合）

都無秋雪詩 都べて秋雪の詩無し

從來唱われることのなかった對象を見つける、全體の掌握よりも部分の新しい發見に努める、詩人の表現欲はそうした方向に轉換し、それが評價されるのである。従って、それまでの終南山にまつわる象徴的な意味はもはや顧慮されることはない。これまで取り上げられなかった、自分一人が獨自在捉えた殊殊な部分へと分節されていくのが、中唐の終南山を唱った詩の特徴と言えよう。それは詩が集團的な文學環境から離れて、個別に分化していく傾向ということもできる。

そうした中唐の終南山の詩群の中で異彩を放っているのが、韓愈の大作「南山詩」である。二百四句にのぼるこの詩は、まず全篇の序に當たる敘述から始まり（一一～一〇）、遠くから眺めた全體の眺望を描き（一一～二四）、四季それぞれの景觀（二五～四二）という時間による變化を描く。續いて周邊の太白山・逍遙谷・昆明池の敘述を含む第一回目の登山（四三～九四）、それは道に迷って引き返し、第二回目の登山（九五～一二〇）も大雪に遭って斷念し、やっと登

頂を果たした第三回目の登山（一一一～一九〇）、そこに詳細に終南山の諸相を描き、最後に終南山を讀えることばを連ねて（一九一～二〇四）結ばれている。

この長い作品の中にも、終南山が帯びていた傳統的なシンボリズムに依據した表現はほとんど見られない。象徴性が集團の中で共有されることによって成立するものであるとすれば、韓愈がここで書くこうとしているのは、自分個人の體驗によつて捉えた、場所により時間によつて姿を變える終南山の總體である。三度の登山を逐一記しているのは、自分の經驗に即して把握しようとする態度を示しているし、終南山を構成している多様な地形をしらみつぶしに記そうとし、一年の季節や一日の朝晩による變容を描くのは、終南山を時間の中で變化してやまない動的な存在として捉え、その全部を自分の目で見たままに書き込もうとしているのだ。そのためにことばは過剰にならざるをえない。というより、ことばを過剰にそそぎ込むこと自體が、この詩の特質となっている。韓愈がおびただしいことばを投入するところに、終南山の總體に近づこうとする韓愈の姿勢が浮か

び上がるのである。

「南山詩」のなかほどには、終南山の峰の様々なかたちの一つひとつに對して見立てを連ね、「或○若……」の直喩を延々と續けた部分がある。これに類似した表現は杜甫にも先例がある。杜甫の「公孫大娘の弟子の劍器を舞うを觀る行」〔詳注〕卷二〇の中で、開元年間の公孫大娘の舞いを回想した箇所に、

燿如羿射九日落 燿として羿の九日を射て落すが如く
矯如羣帝驂龍翔 矯として羣帝の龍を驂にして翔くる

が如し

來如雷霆收震怒 來るときは雷霆の震怒を收むるが如

く

罷如江海凝清光 罷むときは江海の清光を凝らすが如

し

韓愈の「或○若……」の句型が時にリズムに變化を與えるヴァリエーションも交えながら五言二百四句の中で六十句も連續する、その量の過剰そのものがもたらす強烈な印象には及ばないものの、杜甫の詩が「○如……」の句型を

七言二十六句の中に四句並べているのも、直喩の連續が表現そのものへ注目を引き起こす點で韓愈の先驅といえる。しかしながら、句法の類似は韓愈に先鞭をつけながらも、比喩の構造自體には大きな相違がある。杜甫の句は人間である公孫大娘の舞いの神技を、非日常的な、人間を越えたものにたとえている。ところが韓愈の「南山詩」では神秘的な峰のかたちを、極めて日常的な、卑近な物に比喩するのである。たとえるものとたとえられるものの關係が逆轉しているのだ。

或散若瓦解 或いは散じて瓦の解けるが若く
或赴若輻湊 或いは赴きて輻の湊まるが若し
或翩若船遊 或いは翩として船の遊ぶが若く
或決若馬驟 或いは決として馬の驟せるが若し
或背若相惡 或いは背きて相惡むが若く
或向若相佑 或いは向きて相佑くるが若し
或亂若抽筭 或いは亂れて筭を抽くが若く
或嶠若注灸 或いは嶠りて灸を注うるが若し
……

終南山の變容（川合）

瓦、車の矢、船、馬、向かい合ったり背を向け合ったりしている人、たけのこ、灸……ごく身近な、日常的な物ばかりに見立てられている。身近な物に見立てるといふその態度は、韓愈が終南山を自分のもとへ引き寄せようとしていることを示しているのではないか。峰の様々な形に意味を與えて人間の所有物に換えよう、終南山という自分を越えた大きな存在を自分の認識可能なものにしようと、懸命に見立てを連ねていくのである。

このような直喩の連續をはじめとして、韓愈が個々の部分を集積して全容に迫ろうとするのと、賈島以下の中唐の詩人が特殊な個々の場面だけを描くのととは、終南山の全容に迫るか部分に限定するかという違いがあるが、自分の知覺に基づいて個々の部分を捉えるという點では共通している。いずれの場合も終南山に付與されてきた象徴的意味に拘束されることはなく、また終南山の全體を一氣に掌握してしまふこともない。相違はそれを一つに限るか、積み重ねて全部に到達しようとするかの違いに過ぎない。

一つの部分に限定する、或いは部分を集積して全部を描

き盡くそうとする、こうした中唐の態度は、盛唐詩人が限られたことばで全體を把握してしまうのと鮮やかな對照をなしている。ここに盛唐と中唐との認識のありかたの相違がうかがえるのではなからうか。盛唐においては、人は世界の届かぬ先までも世界の全體が瞬時に把握された。それを可能にしたのは、おそらく個人を越えた文化の枠組みが人と世界との安定した調和の關係を保證していたためである。中唐に至ると、世界の認識を可能にした枠組みがもはや解體してしまつたかのようなうだ。中唐文人は自分個人の經驗や知覺に基づいて對象を一つひとつ捉えていくほかないのである。

盛唐詩の風景の特徴の一つに廣大無邊際な景觀があり、中唐ではそれが目立たなくなるが、それも盛唐と中唐の終南山の詩に見られる兩者の違いと連續しているだろう。盛唐詩人は無邊際の領域まで達する世界の全體を短いことばの中に把握する。それは實景というより觀念的なレベルで捉えられた風景であり、その背後には盛唐人に共有された安定した世界觀がある。彼らはそうした世界觀に依據して、

目に見えない世界の果てまで、天地の全體を認識可能な對象とした。中唐では全體を把握しうる世界觀は崩壊し、個人が認識しうる領域の中に敘述が限定される。韓愈が自分の見聞に即して一つひとつ終南山を獲得していったように、或いは他の中唐詩が終南山の特殊な一部分に限定して描いているように、いずれも自分一人の知覺だけを頼りに終南山に向かい合うほかない。にもかかわらず、韓愈は自己の認識を擴大し、世界の全體に迫ろうとする。「南山詩」の初めの部分で、

團辭試提挈 辭を團めて試みに提挈せん

挂一念萬漏 一を掛けて萬を漏らさんことを念う

欲休諒不能 休めんと欲するも諒に能わず

粗敘所經觀 粗ば經觀し所を敘べん

と語るのは、自分自身の經驗、見聞に即しながら、終南山のすべてをことばによって描き盡くそうとする意圖を示すものにほかならない。しかしながらそれが個人には不可能な難事であることも韓愈は承知している。

吁嗟信奇怪 吁嗟 信に奇怪なり

變幻する終南山、人間の尺度では計りきれない對象に面して、韓愈は時折こうした嘆聲を發している。世界は限りなく豐饒であり、人間にはすべてを掌握することはできない。その限界を知りながらもなおそれに挑もうとする緊張が、韓愈の「南山」詩を支配している。韓愈の何もかも書き連ねる表現は、漢賦の手法との類似が指摘されることがある。漢賦も確かにおびただしいことを世界の再現に費やすのだが、そこでは描出された世界と對象としての世界とが過不足なく一致している。或いは眼前にある世界を表現したというより、すでに觀念化されている世界をことばによって表出したといった方がいいかも知れない。したがって漢賦では人の認識と世界とが幸福な一致を實現しているのだが、韓愈の場合は人間の限界を知悉しながら世界の全體に挑む、人と世界との緊張した關係が全編にみながっている。

それまで共有されてきた世界觀の中唐における解體は、同時に因襲の呪縛からの解放でもある。文學を成立させていたものが變質し、中唐の文人は個々に世界を認識し、獨

終南山の變容（川合）

自に文學を築き上げていくことになる。文學は集團から個へ、節目を経ながら變化していくが、盛唐から中唐への變化も文學が個の方向へまた一歩歩み寄る一つの轉折點にほかならない。

本稿は一九九四年度・九五年度文部省科學研究費による共同研究「中唐文學の總合的研究」（代表者、松本肇筑波大學助教授）の研究成果の一部である。